

# 現場へ!

## 「感動の材料にせんとっして」

障害って何? ①

玉木幸則(52)は、「ミスター・バリバラ」と呼ばれる。

「バリバラ」とは、NHKEで毎週木曜の夜に放送中の番組名で「バリアフリー・バラエティ」の略。10年前に障害者向け情報企画として始まり、2016年

から対象を「生きづらさを抱えるすべてのマイノリティー」に広げて、誰にとってもバリアーのない社会をめざす、と進化してきた。

日本のテレビ史上初、障害や差別とお笑いを果敢にくみあわせた番組は、玉木なしには生まれな

った。開始時のチーフプロデューサー日比野和雅(56)は、玉木を「精神的支柱」「同志」という。

玉木は兵庫県姫路市に仮死状態



「ミスター・バリバラ」と呼ばれる玉木幸則。「バリバラ」のスタジオ収録で「だれか置いてきぼりにしてへんかな」とたえず気を配り、話題を普遍化する。大阪市のNHK大阪放送局、いずれも中井征勝撮影



「よう生きとったな、それも無傷で」。阪神大震災で共に生き埋めになった相棒のぬいぐるみのゴリラと玉木。コロナ禍で体調を崩し「かなりしんどい」が政府の委員会、講演と手を抜かない。兵庫県西宮市の自宅

で生まれ、脳性まひに。手足と言葉に不自由がある。「大変やねって?」これが僕の『ふつう』やからね」。関西弁でちよつとひょうきん。一緒にいるとホツとする。

レギュラー出演はひよんなことから。09年に福祉番組の司会を頼まれたが「そんな無理」と一度は固辞。障害者に特化した番組はない方がいいと思っていた。「頑張ってる特別な人として感動的に見せる社会がおかしい」「オモロイやつ、頑張ってへんやつ、いっぱいおるのに、偏ってる。感動の材料にせんとっしてほしいねん」

実は、大阪放送局にも前から多様な生き方をもっと新しい方法で伝えたいとの改革の機運があり、試行錯誤を経て、まずは月1回の企画で翌年開始。「怒られたらやめよ」のはずが好評で今に至る。

障害者を笑うのではなく、障害者「と」一緒に笑い、本音でバリフリーを考える。企画の背骨は

当事者発。テーマは、たとえば出生前診断、在日外国人、コロナ、性的少数者、部落差別、黒人差別、外国人技能実習生から「寝たきり芸人」の登場まで、幅広い。

当事者の声を伝え、時に「ぶっちゃけ、ホンマはどやねん」と突っ込む。視聴者は笑いながら、心の奥底にある差別や偏見に気づかされてゆく。

玉木の活動の原点は、4歳から1年半肢体不自由児療育施設に入所したことだ。「水族館行こな、といわれて出かけた帰り、だまし討ちや。何で僕だけここにいらなあかんの」。3カ月泣き通した。

小中は地元校で学んだが、高校は「泣く泣く」全寮制の養護学校へ。日本福祉大学を卒業後、92年から自立生活運動にのめり込む。転機は25年前の阪神・淡路大震

災だ。「アパートが崩れて生き埋め。隣の学生は即死やった。よう生きとったな。生きるってことは何かの役割があるんやろな」と。「バリバラの視聴率は1%ほど。でもちよつとでも伝わってほしい。ホンマのことを聞いて自分の言葉でしゃべる、発信するのが僕の役割やなと思う」。バリバラはそのひとつの舞台。政府の障害者政策委員会の委員を務め、学校や市民講座で講演もする。

「障害って見かけだけやなくて、暮らしたらさや生きづらさのこと。コロナ禍で、多くの人が自由を制限されて、前の生活に戻れるのか不安もあるよね。でも僕たちなんか、ずーっと不安な気持ちで生きてきてるんよ。実は誰にもある不安な気持ちによりそって、軽くしていくのが福祉の力。だからみんなが『助けて』って、言える社会にすることが大事なやと

思うねん」 敬称略(生井久美子)